

小児看護学実習において看護学生が患児の母親に及ぼす影響に関する文献検討

村上清楓 坪川麻樹子 松井由美子
新潟医療福祉大学 看護学科

【背景・目的】小児看護学実習で、筆者は母親からの不安をもとに患児に対しての援助を行うことが多く、患児へのアプローチと同時に母親の不安な気持ちに対しても援助を行うという経験をした。母親は子どものために学生とコミュニケーションを取っているという印象があり、母親にとって学生の存在が負担となっていることはないかと疑問に感じるがあった。学生がどう患児の母親と関わるかを考える際に、小児看護学実習の受け持ちを引き受けた母親自身はどのような気持ちで入院生活を支え、学生と関わっているのかを明らかにすることが必要であると考えた。

そこで、本研究の目的は、小児看護学実習において、患児と母親が穏やかに入院生活を送ることができるように、受け持ち児となった患児の母親は実習期間中どのような思いで看護学生と関わっているのかを過去の文献から検討し、学生と母親の関わりに関する研究の動向を明らかにすることである。

【方法】医学中央雑誌 web 版を用い、「小児看護学実習」「学生」「母親」のキーワードで原著論文に絞り、検索を行った。得られた文献 20 件のうち、対象が学生もしくは母親でないものは除外し、19 件の文献を対象とした。これらの文献を、目的、記述内容を精読し、研究内容によってカテゴリー化し、研究の動向を分析した。

【結果】1. 「実習による学習効果」7 件

病院実習では、学生は患児との遊びを多く体験することで、それが学習成果へと繋がると述べられていた。学生が実習満足感を感じる要素としては、「自分の看護の成果の実感」「実習を通して感じた小児看護の理解」「実習しやすい環境」という 3 項目が挙げられていた。また、カンファレンスを活発に行うことは必要不可欠であり、母親とのコミュニケーションがカンファレンステーマになりやすいと述べられていた。

2. 「学生と母親との関係形成に関する研究」4 件

学生が小児看護学実習において体験する困難は 4 つの側面に分類されていた。中でも特に学生が困難だと感じている項目は「母親との関係を築き深める過程への関わり」であった。母親の抱く思いやストレスへの対応、母親のネガティブな態度にどう関わるかを困難と感じる学生が多いことが明らかになっていた。それに対し学生は、母親との対話や意思を尊重するなど支持的態度を示し、心身の疲労を軽減するための援助を行い、信頼を得られる捉え積極

的に行動していた。

3. 「実習中の母親の心理・思いに関する研究」3 件

母親が実習の受け持ちを引き受ける原動力は、「社会の役に立つので病気の子どもでも生まれてきた役割がある」ことなどが挙げられた。また、受け持ちを依頼された時の「承認のタイミング」が実習中の認識的变化プロセスの基盤となり、その後学生の実習効果を考えながら関わり、援助してくれる学生が「安らぎの存在」へと変化していた。実習を引き受けて良かったと感じている母親が多い一方で、「子どもとの仲を取り持たなければいけない」など母親に負担を与えている部分もあった。

4. 「疾患を持つ子どもと関わる学生の学びや変化に関する研究」3 件

学生は、疾患に対する先入観に影響されながらも子どもと積極的に関わり、子どもの思いを尊重し子どもの持つ力を引き出すことで、イメージを肯定的に変化させていた。また、児の内面を知ること、児への愛情や支えたい気持ちに変化していくことが述べられていた。児への愛情と支えたい気持ちは、母親らがどの程度疾患を受容しているのかを理解することになり、家族のより強い相互依存関係が理解できると述べられていた。NICU 実習では、母親と児が相互に影響し合っていることから、常に母子一体で捉えることの大切さに気づき、母子の理解が深まっていた。

5. 「実習での学生の視点・行動に関する研究」2 件

「子どもや家族との関係形成」の実習評価が低い学生は、バイタルサイン測定の際不安の強さや緊張感から、子どもや家族への説明や子どもの反応を受け止めきれず、キャラクターや母親に頼った自分中心の観察となっていることが明らかとなっていた。また、学生は初めて受け持ち児を訪室した際、子どもの様子をよく見て、どう接するかを考えていた。しかし、患児が疾患をもった子どもであるという認識は希薄であると述べられていた。

【考察】本研究では、小児看護学実習において、学生は受け持ち患児との関わりよりも母親との関係形成を困難に感じていることが明確となった。受け持ち患児を引き受けて良かったと感じている母親が大半を占めているが、一方で母親は常に子どもとの仲を取り持ち、学生に気を遣ってしまうという現状もある。実習指導者や教員は、学生がどのような目的・目標を持って実習に臨んでいるのか、日々の実習から何を感じ、何を学んだのかを母親に伝えることで安心感につながり、負担感を軽減することができる。

【結論】母親の負担等を最小限に抑えられるような関わり方が必要である。そのためには、学生だけでなく、教員、指導者も母親にどう関わるかを検討する必要がある。